

古代歌謡の一考察

—「ぬばたまの夜は出でなむ」—

戸 谷 高 明

古事記上巻にみえる八千矛神と沼河比売との唱和の歌は、その特殊な内容と官能的描写の生々しさなどにおいて記紀歌謡の中にあつても、いわゆる古代歌謡としての性格を豊かにもち、さらに演劇の問題などから種々の話題をもつていのであるが、しかし小稿ではそれらとの直接的なふれ合いから離れて、沼河比売の答歌に出てくる「ぬばたまの 夜は出でなむ」の語句について、解釈上の試みを述べてみようと思ふものである。

八千矛神は大国主命の別名とされている呼び名で、八千矛神の名で伝えられているこの話も、のちに大国主命の一連の物語に附託されたものである。さて、八千矛神は高志国の沼河比売と結婚されたようとして、お出かけになり、比売の家にたどりついて「八千矛の 神の命は 八島国 妻求きかねて……」と妻問いの歌をうたわれ。この比売は利発で美しい評判の女性であつた。遙々配偶者を求めてやってきた神は、太刀の緒はもとよりのこと、オスヒさえも解かずに比売の寝ている板戸を押しゆすぶり引きゆすぶりして立ちつづけ、比売の応諾を待つけれども効果なく、やがて青山に鷓が鳴い

た。すると鷓が鳴き立て、鷓が鳴き出した。夜明けが近づいたことを知ると、黎明を告げる鳥の音がうらめしく、こんな鳥は鳴けないようにこらしめてやりたい、とうたうのである。真剣な妻問いであるだけに神の失望もまた大きかつた。

八千矛神の焦燥と絶望を聞きおよんだ比売は、板戸を開かずに家の中から、私はか弱い女ですから今すぐ貴方の求めに応ずることは出来ませんが、将来は貴方の妻になりましようから御身を大切にしてください、とうたい（ここに「いしたふや 天馳使 ことの 語りごとも こをば」という雑詞が入る）、更に比売は「青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ 朝日の咲み来え来て 糝網の 白き腕 沫雪の 若やる胸を そだたき たたきまながり 真玉手 玉手差し纏き 股長に 寝はなさむを あやに な恋ひきこし……」と官能的な言葉で闘中の睦まじき姿をうたい、神のはやる心を慰め、夜の到来を待つのである。古事記はこの歌について「其夜者不り合而、明日夜為御合也」と書いている。そこで「青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ」は「明日夜」と結びつけて考えられるわけであるが、「ぬばたまの 夜は出でなむ」の解釈になると諸説があつて定まっていない。以下、この語句の解釈につ

いて考察する次第である。

二

「ぬばたまの 夜は出でなむ」の原文は「奴婆多麻能 用波伊伝那牟」とあって訓みの上での疑問はない。では説の分れるのは何によるかという点、一つには「なむ」に関する文法上の問題、もう一つには「出でなむ」の主格は誰か、あるいは何かの問題である。

今更、いうまでもないことであるが、一応の順序として、まず「なむ」についてみると、「出で」は下二段活用動詞であるが、未然・連用とも同形であるために、この「なむ」は、(A)動詞の連用形に接続して未来の推量などを表わす、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」のついたもの、(B)動詞の未然形などについて、他に詠え望む意を表わす終助詞とみられるもの、の(A)(B)いずれに属するかによって解釈が異なるのである。

この「なむ」は殊に和歌を解釈する場合、留意しなければならぬ。すなわち、

(1)動詞にあたる語が一字一音の形(万葉仮名および平仮名による表記)で書きあらわしてあって、しかも未然・連用両形の形がちがう場合は、どちらに属するか明らかで、例えば、

伊豆の海に立つ白波のありつつも都芸那牟ものを乱れ始めめや

(十四・三三〇)

は(A)。

ま遠くの野にも安波奈牟心なく里の真中に逢へる夫なかも

(十四・三三六)

は(B)となる。ところが、

(1)活用が未然・連用とも同形の場合は、一字一音の表記にかかわらず意味の上から決定しなければならない。したがって、

一もと昔は子持たず立ちか阿礼那牟あたらすが原(記・空)

では(A)。

白袴の袖数めず宿るぬばたまの今夜ははやも明けば將開

(十二・三六一)

では(B)として解釈することになる。

さて、以上の例に照らして「用波伊伝那牟」をみると、(1)に当るわけであるから、意味の上でその所属を考えなければならぬことになる。ところがこの箇所は意味の上からの決め手がなければかりか、更に主格の問題——すなわち、沼河比売自身なのか、相手の八千矛神なのか、あるいは夜をさしているのか——とからんで眼を迷わすのである。そこで手許の資料によって従来の諸説を分類すると次のようになる。

主 格	品 詞	筆 者・書 名 等
沼河比売	(A)	①契沖『厚顔抄』古事記和歌略注・元祿四(1691)成。②宣長『古事記伝』寛政(1790)文政(1818)開板。③守部『稜威言別』巻廿マデ弘化四(1823)刊。④次田潤『古事記新講』大正三。⑤太田水穂『記紀歌集講義』大正五。⑥松岡静雄『記紀論究』古代歌謡(上)・昭和七。
		①中島悦次『古事記評釈』昭和五。②相磯貞

八千矛神	(B)	三『記紀歌謡新解』昭和七四。③西郷信綱『古事記』(続日本古典読本) 昭和三五。④⑥倉野憲司『古事記』(現代語訳) 昭和三五。『古事記・祝詞』(日本古典文学大系) 昭和三五。⑤土橋寛『古代歌謡集』(日本古典文学大系) 昭和三五。
夜	(A)	①敷田年治『古事記標注』明治一〇。②④武田祐吉『八千矛神』(『国文学解釈と鑑賞』) 第三卷第九号昭和三五。『記紀歌謡集全講』昭和三五。③山田孝雄『文学』第七卷第九号『記紀歌謡研究』(五)。

右のように、沼河比売を「出でなむ」の主格と考え、「なむ」を(A)として解釈する説は最も古いもので、契沖は「夜者將出ナリ。夜ニ成ラハ出テアハムナリ」として、夜になつたならば出て会いましようという意味に解し、宣長もこれに従いながら更に細かく「こは關より起出で、戸を開きて入奉むと云意にて、出なむとは云なり」と説明し、外に出て会はむというのではないと言っている。宣長の解釈は、「夜に成て、出て入奉むと云なり」(守部)、「夜になつたら戸を開いて出迎へませう」(次田氏)という具合にとりいれられ、契沖に近いものとしては太田氏の「夜になつたらば戸を明けて出て行つて逢はう」があげられる。これらは「出でなむ」を夜になつてからの比売の行動として考え、しかも宣長らは「出でなむ」では外に出るか、少くとも關より起出ることになり、これにつづく關中の官能的行為に直ちに接続しないとことから「入れ奉む」という意味をつけ加えて解釈しているのであって、そこに無理が感

じられる。

契沖・宣長らの説は昭和の初期まで受けつがれていたのであるが(もつともその後消滅したわけではない)、次の八千矛神を主格とする説の現われるに及んで完全に所をかえてしまった観がある。主格を八千矛神とすると「なむ」はおのずから他人に対する希望を表わす終助詞としてみることになり、「夜はいらっしゃい」(中島氏)とか、更には「暗い夜には貴方がお出でになつて欲しい」(相磯氏)という意味になる。倉野・西郷両氏も同様の立場から解し、土橋氏は「夜になつたら出ていらっしゃい。イデは出ツの未然形。ナムは願望の助詞。八千矛神に対して言う」と丁寧な注を施されている。これならば前説のように「入れ奉む」という語を補わずともよいわけであるが、しかし、「お出でなさい」という意味を表わすのに「出でなむ」という用法が適當であるか、また八千矛神を主格とするためにはこれだけでは少し無理がありはしないだろうか、などの疑問が矢張り残るであろう。

もう一つの説は「夜」を主格とみるもので、はやくは敷田年治が『古事記標注』の中で、「是は日が入隠れなば即夜とならむと云を長なく云へる古言の用法妙也」といい、宣長の説をさけている。敷田のこの解釈は長い間、注目されることなく過ぎたが、その後、武田博士は「青山に日が隠れたら 真暗な夜になりませう」(『八千矛神』)と解釈され、『記紀歌謡集全講』においてもこの立場から「夜の起るのを推量する。ナムは、推量の助動詞の終止形」といわれているが解釈上の説明を詳しく書くことができない。武田博士の解釈は敷田とは関係なく考えつかれたのかも知れないが、山田博士は敷田の説に基づいて「日が隠らば」の主格が日であるのに対して、

「夜は出でなむ」の「主格が夜である」と見る方が、物のいい方としては自然である」といわれ、敷田はこれを「古言の用法」であるといっているが、これは「夜といふものを実体のあるものと考へる、考へ方で」あつて、これは「古代人の物の考へ方なのだらう」と述べ、このような考え方が万葉集に全然みられないところからみて、万葉時代より遙かに古い人々の思想であらうと推察されている。山田博士もいわれているように「夜が出る」という言い方が他に見あたらないことはこの説の弱点であるが、説を補う意味で動詞「出づ」を用いている表現を万葉集に求めると、人間の行動を示すものが圧倒的に多いことは勿論であるが、これについては月を主語とするもの十七例、色を主語とするもの十五例を数えることができ、このほかには雲・水・川・穂・玉藻・にほひなどがある。これらは動的でしかも実体のあるものであるが、「色」や「にほひ」は夜を出づ、い、と考える考え方への橋渡しになるかもしれない。更に又、「夜去り」「夜隠り」などの表現を通して、夜がどのように考えられ、うたわれていたかを知ってだてになるであらう。

「夜去り」は人麻呂歌集の一首(七二〇)のみであるが「春去り」「秋去り」「夕去り」などの類語がある。「去り」は「…ニナル」の意に解されるが基本の意味は「来ル」で、その表現には実体のあるものに対する思考に通うものがあるように思われる。「夜隠り」に似た詞には「冬隠り」をはじめ「朝(夜)霧隠り」「雨隠り」「青垣隠り」「殿隠り」「葉隠り」「藪隠り」「水隠り」などがある。「隠り」に近い表現に「隠り」がありこれは「雲隠り」の語によつて知られるように、ある物(月や山など)がある物(雲)の蔭にかくれて見えなくなる状態を表わしている(「雲隠り」が死を意

味するようになったのは人の死を月などが忽然と雲に隠れるのに譬えたものであらう。「隠り」の意味は「大和は 国のまほろば たなづく 青垣 山ごもれる、大和しうるはし」(記三二)に見られるように、原義はある物(ここでは山)に包み囲まれている状態を指すものと考えられ、朝霧にたちこめられている情景が「朝霧隠り」「雨に降りこめられてのが「雨隠り」、繁り葉にかこまれている状態が「葉隠り」というように、その他もこの立場から解釈される。しかるに「夜隠り」と「冬隠り」には諸説がある。それは先にあげた例がいずれも実体のあるものであるのに、両者とも非実体的なものであるために思われる。しかし例えは、

恋ひ恋ひて逢ひたるものを月しあれば夜は隠るらむしましはあり待て
(四一六三・大伴坂上郎女)

の場合、空に月があるのでまだ夜のうちだらう(原義を生かせば「まだ夜に包まれ蔽われているであらう」)の意になり、したがって、

倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光ともしき

(三一三三・間人宿禰大浦、類歌九一五彦沙弥女王)

の「夜隠り」においても、夜闇が地上を蔽いこめている状態を表現したものと解されよう。もしもこのように考えることが出来るならば霧や雨などのように、夜や冬が地上を包みこもらせるといふ、実体のあるものに対すると同じ考え方が存在していたことになる。

以上のように夜が「出づ」といふ表現を見出すことは出来ないが、夜が実体のあるものと等しい立場で扱えられていたのではないかという想像を補う意味はあるかも知れない。この考えが古代人のそれとして肯定されるならば、青山に日が隠れたなら「夜が現われ

ませう」ということになる。日が山に隠れると八ぬばたまの夜がやつて来るという考えは如何にも素朴で原始的に思われる。しかし、これではうたわれている内容が当然すぎるし、また夜を待つ比売の言葉としては常套的でも足りないという批判も予想される。

そこで更に、万葉の次の歌を例証として新しい解釈を試みたいと思ふ。卷十六—三七八の、

無耳の池し恨めし吾妹子が来つづ潜かば水は洒れなむ(水波將瀾)は、問題の箇所とほぼ同じ位置に仮定の条件を示す接続助詞「ば」と助詞「は」および「なむ」を用いている。両者を並べて図式化してみると、

青山に日が隠る
 …吾妹子が来つづ潜かばぬばたまの夜は出でぬむ
 水は洒れなむ

となる。周知のように万葉の歌は、三人の男に求婚された娘といふ女性が煩悶の末、池畔をさまよつて遂に投身し、この時、男たちが哀しみの情に堪えずうたつたという三首中のものである。大意は「無耳の池は恨めしい。吾妹子が来て池に沈んだなら、水は洒れてほしかったのに」となる。もつともこの解釈は「なむ」を終助詞とみてのものであるから、当然ほかの解釈、すなわち「水は洒れてしまふだろう」という説も予想されるが、大和物語(百五十段)などにみえる玉藻投身伝説の歌「猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし」の「まし」にも二つ用法があるが、この歌では伝説との結びつきから「猿沢の池も情のないことだ。玉藻がかづいたなら(一説。水中の藻を被いたなら)水はひてほしかったのに」の意に解さなければ筋が通らない。万葉の歌も題詞および上二句「無耳の池し恨めし」を考えると矢張り詠えの意に解するのが妥

当であろう。したがって、

青山に日が入つた
 夜になつて
 吾妹子が来て池に沈んだなら
 水は洒れて
 ほしい。

というように、対称的な表現として解釈することができるであらう。前者が呼びかけているのは夜であり、後者は池(水)に対してであつて、どちらも非情の対象に向つて自分の希望をうたつているのである。

三

さて、「出でなむ」の主格を「夜」、「なむ」を終助詞と考へる場合、枕詞「ぬばたまの」に注目しなければならぬであらう。といふのは「ぬばたまの夜は出でなむ」の語句によつて、 \wedge 真暗な夜の出現を望む心持ちがうたいこまれていのではないかといふ推測をもつからである。それは「妻問ひ」の風習からみて当事者たちは「暗い夜」を最も応わしい状況として望んでいたのではないが、したがつて「ぬばたまの」は夜の枕詞として修飾の意味で添つていのみではなく、それのもつ語源的内容が生きたものとして用いられているのではないかと想像されるからである。

「妻問ひ」の結婚形態は奈良朝の頃まで行われていた如くであつて、記紀・風土記および万葉などによつて「妻問ひ」の風習がどのようなものであつたかを知ることができる。この時代における求婚は「よばひ」といふ古い言葉が意味しているように、求婚者が門前や窓の近くに立つて——八千矛神は板戸の前に立つていた——相手の女性を呼び結婚の承諾を求めたのである。女がその求めに応じさえすれば結婚が成立したものと思われていたので、万葉が「結婚」

を「よばひ」と訓ませているのもそのためであらう。求婚者は幾山河を越えてゆく遠路であっても、また雪や雨の降る悪天候であつても、それらの環境に憶することなく暗い夜道を通いつづけたのである。八千矛神のように遠い土地に妻問う場合には、身のまわりに着ているものさえも解かないうちに、夜が明け初めてきて思いを遂げられないことが多かつたらしい。万葉の「他国に結婚よばひに行きて大刀が緒をいまだ解かねばさ夜ぞ明けにける」(十二—三〇)は八千矛神の歌を要約したものでらしく、このように作りかえられて広くうたわれていたと思われるのも、これに類することが現実において起つていたからであらう。「こもりくの 泊瀬の国に さ結婚に わが来れば……」(十三—三三)とはじまるこの長歌も八千矛神の歌の影響を受けたものであるが、「妻問ひ」の男性が如何に苦しい体験を積まねばならなかつたかがわかる。女が戸を開けない時は雨や雪の道であらうと孤独の念を抱きながら帰途につくより方法がなかつた。湯原王が娘に贈つた「うはべなきものかも人はしかばかり遠き家路を還す念へば」(四—三三)の歌にみるように遙々出かけて行つても相手が逢つてくれなければどうしようもなく非情の女を恨んで帰るだけだったのである。湯原王は娘子の意志によつて逢えなかつたのであるが、お互に思い合つていても二人の間を妨げるものがあった。沼河比売が「ぬえくさの 女にしあれば」とうたい、八千矛神の求めに即刻応じられないといつてゐるのも若い女性が思うままに行動できなかつたことを物語つてゐる。

男の誘惑から女を守り、一方また女の自由行動を束縛したのは彼女らの母親であつた。そこで男は女の家を訪ずれ「奥山の真木の板戸をおし開きしゑや出で来ね後は何せむ」(十一—三五)と後でど

のようにならうとも板戸を開けて出ていらつしやいと呼びかけ、あるいは「大君の境ひ給ふと山守すゑ守るといふ山に入らずは止まじ」(六—九〇)という情熱を傾け、母親の嚴重な監視をも怖れない意気をもつてゐた。女は男の求めに応じて共寝しようと思つても母親は「小山の鹿猪田禁ること」(十二—三〇)守つていて心のおもむくままに振舞うことができないので、「玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ」(十一—三三)と母親の眼を偽つて逢う瀬の楽しみをつくつたりして、親に知られることなく秘かに逢つていたのであるが、多くは「ここだくも 念ふ如ならぬ」(十三—三三)歎きを重ねていたのである。

さて「妻問ひ」の風習を概略みてきたのであるが、ここで殊に注意されるのは男が「さ夜ぞ明けにける」とか「さ夜は明けこの夜は明けぬ」あるいは「ぬばたまの 夜は明け行きぬ」などとうたつてゐるように、夜が明けて明るい朝が来るのを最も気にしてゐたことである。求婚の交渉は人皆が寝静まつてゐる夜に限られていた。よしや思いが通じて共寝をしても「庭つ鳥 鶏は鳴くなり 野つ鳥 雉は動む 愛しけくも いまだ言はずて 明けにけり 吾妹」(紀六)とあるように夜が明けたならば後朝の別れをしなければならなかつた。いずれにしても若い男女にとつて夜は絶対的なものであつて、八千矛神も雉や鶏の鳴きごえにつれて夜が明けるといふ觀念をもつてゐたからこそ、「この鳥も 打ち止めこせね」といつて憤り嘆いたわけである。

このように夜明けを嫌つてゐたといふことは、とりも直さず若い二人にとつて夜が絶好の世界であつたことを意味する。殊に親の眼を偽つて逢う瀬を楽しむためには暗い夜へぬばたまの夜が望まし

かつたといえる。したがって、夜に対するこのような関心と期待とに照応するものとして「青山に 日が隠らば ぬばたまの 夜は出でなむ」を理解すべきではなからうか。

また「ぬばたまの」の語句について考えてみるに、「ぬばたま」は射干の実、その実が黒いところから「黒」にかかる譬喩の枕詞であって、本来的には黒にのみかかっていたものと思う。記紀には「ぬばたまの 黒きみ衣を」「ぬばたまの 甲斐の黒駒」の二例。万葉には「ぬばたまの黒髪山」「ぬばたまの黒髪敷きて」「ぬばたまの黒馬」「ぬばたまの黒牛瀉」あるいは「ぬばたまのわが黒髪」「ぬばたまの斐太の大黒」など、時代的に新しい作も二三あるが殆んどが作者不明の歌である。この黒にかかる用法から「夜」にかけていうように転じたのは黒と夜の暗さとの共通性からであろう。「夜」にかかる例は記紀には沼河北売の歌一例のみであるが、万葉に「ぬばたまの夜渡る月」など多くの用例があり、更に転じて夜に縁のある夢や月や夕などにかけて用いるようになっていく。

枕詞は常に一定の語の上にかかって、その語を修飾したり句調を整えるために用いられるのであるが、枕詞の多くは意味のない語としてあつたわけではない。当面の枕詞「ぬばたまの」においても、射干の黒い実という具体的な色彩を思い起すことによつて、抽象的觀念的な黒ではなく具象性をもつた黒がイメージの中に浮んでくる仕掛けになっているのである。ところが、このように内容のあつた枕詞も時代の推移につれて本来の意義は次第に忘れられ、遂には意味のない修飾語として多用されるに至り、夢や月にかけていう時には「黒」とか「暗い」という具体的なものをまたない単なる夜の代表的表現になり変つていく。万葉には暗い夜の表現として「闇夜」

「闇の夜」の語をみるが、これなどは「ぬばたまの夜」の固定的形式的表現に代つて用いられるようになったものといえよう。

枕詞の推移からみて「夜」にかかる「ぬばたまの」に「黒」に通う「暗い」という意味が含まれていたとは必ずしも言えない。もしも本来の意識が保持されていたならば「ぬばたまの夜」に表現されている世界は「暗い」夜であつたと言ひ得るであろう。

沼河北売が「ぬばたまの夜」とうたつた時、それがどのようなのであつたか外見には判断しかねるのであるが、「妻問ひ」の男女が等しく夜を望んでいたこと、しかも「暗い」夜を好ましい状態として迎えていたであろうことを思い合はすならば「真暗な夜」という意味に解する方が作意に近いように考えられる。

四

沼河北売は八千矛神に対して次のようにうたつたのであろう。青山に日が入つたなら、真暗な夜になってほしい。そうしたならば朝日が花やかに射すように、にこやかな笑顔になつてきて、袴の網のような白い腕、沫雪のような若やかな胸を……と、暗夜を希い官能的な闇中の交歓をうたい、八千矛神の激しい恋ごころを鎮めたのである。そして、繰返し述べてきたように「ぬばたまの 夜は出でなむ」にうたいこめられている心持ちは誰しも等しく経験し望んでいたことであろうから共感をもって理解されたものと思う。

以上の解釈によつてこの語句が蘇り、歌全体の理解をも助くるものと考え、試案を提出した次第である。（昭和三十三年五月稿。同三十六年一月古代文学会で発表、補正。）